

とを希望するのである。博士の如き有力家が日本や支那の數學に就て評論をして呉られることは我々數學史に指を染むるものに取りては何よりも嬉しうのである。

## 新たに発見せられた

## 涅槃經の疏

池内 宏

### 一 新出の經疏

本年七月、高麗板の涅槃經疏の零本が発見せられた。場所は朝鮮全羅南道順天郡松光面外松里の松廣寺、発見者は總督府の學務局編輯課長兼古蹟調査課長小田省吾氏である。

余は九月の上旬から下旬に亙つて朝鮮の古蹟調査の爲めに咸鏡南道に出張し、其のついでに、前後の

和漢數學上に於ける希臘や印度の類似點のことなど、に就ては何れ目下起草中の論文に於て今少し委細に記述する積りである。

數日、京城に於いて中樞院書記官長小田幹治郎氏を煩はして、目下研究してゐる高麗の大藏經に關する若干の資料を蒐集したのであるが、偶然前の小田氏以下單に小田氏といふのは小田省吾氏の新しい発見の事實を聽き知つたのは、同月二十八日咸興から京城に引き上げて來た當日であつた。氏の示された発見當時の掌控に依ると、其の「大般涅槃經疏卷第九」の奥の跋行は氏もいはれた通り、それが同じやうな奥書のある内地の南都佛教圖書館所藏の華嚴經隨疏演義鈔(板本)と相俟つて、否な之にも勝つて、高麗の藏經史上非常に貴重なる資料であることを直白してゐるものである。而して原本は正に松廣寺から取寄せ中であるといふことであつたから、一二日で退城しようとす

る余は其の要部の寫眞を追送せらるゝ事を希求し、小田氏は直ちに之を快諾せられた。歸京の後間もなく、小田氏は十月一日發行の京城彙報(報)を惠まれた。これには吾々にとつて有益なる「朝鮮古書の一瞥」と題する氏の文が載せてあるが、特に之を贈られたのは、中に新發見の涅槃經疏の奥書についての上記の考を述べてをられるからであつた。たゞ余は之を一讀した際、若し經疏其のものゝ撰者の名が判つたら、義天の敎藏目錄(此の目錄については後に述べらるゝ)などを參考して藏經史の研究上何か面白い結果が獲られるかも知れないと思つたから、書面を以て其の事を小田氏に告ぐると同時に、原本の卷首が缺けてゐなければ、其の部分の寫眞をも併せて送られたいことを希望した。十月の末になつて、希望通り(一)の寫眞七枚の惠贈に預かつた。それを見ると、挿入の圖版に現はれてゐる如く、撰者の名は明瞭であり、同時に内容の一部分も判つた。而して其れから得ら

新たに發見せられた涅槃經の疏

るゝ考察の結果は、余の漠然たる當初の期待を超えて遙かに大なるものであつた。即ち新發見の涅槃經の疏は、頗る珍しい奥書を具備してゐる朝鮮最古の板本(現存してゐるものゝ中で)であるばかりでなく、疏其のものが日本・支那・朝鮮を通じて他に傳はつてをらぬ唯一無二のものなのである。そこで余は發見者たる小田氏の承認を得、之を江湖に紹介すべく此の一文を草することゝした。

## 一一 經疏の内容及び其の撰者

(圖版第一參照)

小田氏の惠まれた寫眞は計七枚、中、一枚は原本の表装の體裁を示したものの(I)、他の六枚は第九卷の首一頁(II)、同末尾二頁(III, IV)、及び第十卷の首一頁(V)、同末尾二頁(VI, VII)である。而して之に左の調書が添へてあつた。

大般涅槃經疏卷第九第十合本 一冊

同書ノ大サ 横 一尺一寸八分

縦 一尺 〇九分

厚 九分五厘

紙數 卷九 四十九枚

卷十 四十七枚

表紙 二枚

卷首及卷尾白紙 各一枚

版面輪廓 横二頁通シ一尺一分五厘乃

至一尺九寸三分極少ネツ、相違アリ、

縦 七寸八分

行數字詰 右版面一枚ニ付三十行、二

十二字詰、一字ノ大サ約方

三分五厘

順天郡の松廣寺に現存してゐる涅槃經疏の古板本の  
卷數・冊數及び全體の體裁等は斯くの如きものであ  
る。惜しいことに、第九卷及び第十卷の外は散逸し

て傳はらぬが、本來十卷若くはそれ以上あつたもの  
であることは此の調書だけを見ても明かである。

さて支那で譯出せられた涅槃經にはいろいろ種類  
がある。其の中普通に涅槃經と呼ぶる譯の完た  
ものは、北涼の曇無讖 (Dharmakīrti) の大般涅槃經  
四十卷と劉宋の慧嚴等の再治した大般涅槃經三十六  
卷とであつて、前者は所謂北本涅槃經、後者は所謂  
南本涅槃經である。而して兩本の相違は固より卷數  
のみではないが、こゝに特に注意したいのは、前者  
に於いては、品目の一なる梵行品が其の第八位を占  
めて、經本の第十五卷から始まつてゐるのに、後者  
に於いては第二十位に置かれて、經本の第十四卷か  
ら始まつてゐることである。従つて次の品目嬰兒行  
品・光明遍照高貴德王菩薩品等の順位并にその卷  
數も違ふ。之を表記すれば次の如くである。

北本涅槃經

卷第十五	梵行品第八之一
卷第十六	同 第八之三
卷第十七	同 第八之三
卷第十八	同 第八之四
卷第十九	同 第八之五
卷第二十	同 第八之六
卷第二十一	嬰兒行品第九
	光明遍照高貴德王菩薩品 第十一
卷第二十二	同 第十之三
卷第二十三	同 第十之四
南本涅槃經	梵行品第二十之一
卷第十四	同 第二十之二
卷第十五	同 第二十之三
卷第十六	同 第二十之四
卷第十七	同 第二十之五

新たに發見せられた涅槃經の疏

卷第十八	同 第二十之五
卷第十九	嬰兒行品第二十一
	光明遍照高貴德王菩薩品 第二十二之一

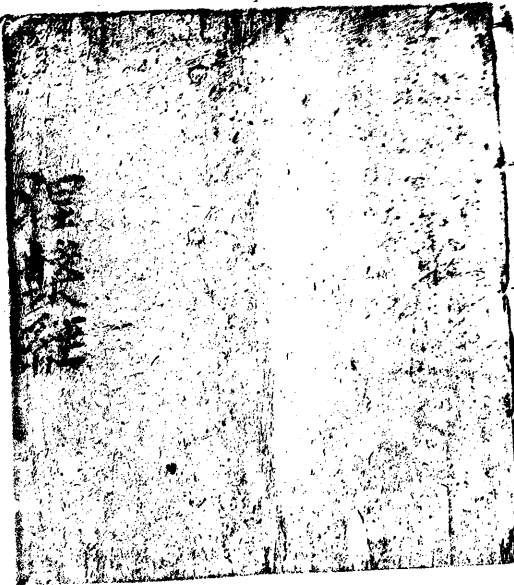
翻つて新發見の涅槃經疏の第九卷を見ると(II)、首題の下に此の卷に相當する經本の卷數を示した「經第十五至第十八」の文字があり、本文の首には「梵行品第八」とあつて、經本の卷數と品目の順位との關係が、正に北本の其れと符合してゐる。又た第十卷(V)の首題の下には「經本十九至二十三」とあり、疏の本文は「經曰、尔時王舍至横、加逆害、此品大文第三、述闍王事也」の句で始まつてゐて、品目は掲げてないが、此の十九といふ經本の卷數と疏の本文とに注意を拂つて北本の第十九卷なる梵行品第五節を見ると、其の最初の句は「爾時王舍大城阿闍世王、其性弊惡、喜行殺戮」であつて、彼れと是れとの

間に争ふべからざる一致が認められる。それから、第十卷の末(VI)、即ち經本の第二十三卷に相當する部分には「經曰、二者大寂靜故」云々、「經曰、三者一切知故」云々、「經曰、四者身不壞故」云々、「經曰、善男子世間名字」云々、「經曰、以純淨故」云々、「經曰、善男子」云々とあり、是等も亦た何れも北本の第二十三卷なる光明遍照高貴德王菩薩品第三節の末の部分の文句であるのである。だから此の涅槃經の疏が北本涅槃經の疏であることは毫も疑を容れない。而して北本は卷第四十、憍陳如品第十三之二で終つてゐるのであるから、本來疏の卷數は、必ず十卷を超えて更に數卷あつたに相違ない。

新出の經疏の第九卷及び十卷の尾題の下に(III、VI)、細字を以て「四十九」と記しあるのは、何を示した數字であらうか。小田氏の寄せられた調書によると、第九卷の紙數は四十九枚、第十卷は四十七枚であるといから、或は各卷の丁數を示した

ものであつて、原本の第十卷に二枚の缺丁があるのではなからうか。これは原本について取調ぶべき問題である。

次に此の疏の撰者は、各卷の首題の下に明記してある如く唐の大薦福寺の沙門法實である。宋高僧傳<sup>四</sup>に據ると、實は玄奘三藏の門下の神足で、同じく玄奘に事へて性は明敏、勤恪の心は同列を抜いたといはれる普光と共に師の譯經事業を佐けて其の美を濟さしむるに大なる功勞のあつた名僧である。即ち二僧の奘師に於けるは、羅什が道融及び叡を得たるが如しといはれてゐる。而して實はまた義淨の譯場にも參した。高僧傳の實の傳の首題には、其の名の上に「唐京兆大慈恩寺」の文字を冠してあるが、これは玄奘の門下たることに重きを措いたが爲めであつて、傳の本文には「長安三年<sup>西紀七〇三</sup>於福先寺・京西明寺、預義淨譯場、實與法藏・勝莊等證義」と記してある。たゞ大薦福寺の名は實の傳には見えてをら



I 表紙

II 卷第九首

V 卷第十首

III 卷第九末尾 其一

VI 卷第十末尾 其一

IV 卷第九末尾 其二

VII 卷第十末尾 其二

松 堂 司

大般涅槃經疏卷第九 經第十九至第二十一 唐大馬橋寺沙門 法賢 述

梵行品第八  
自下釋梵行義也。慈非善捨是梵。故梵所行故梵稱善。故名為梵行。此品廣明名梵行。品問何人名梵。此是梵。目是梵所行何經。就是梵稱之。量其重云。何者。準順正理。論釋初釋。大梵王名云。廣稱所居名之。為梵。此梵即大者。俱舍論云。亦名為梵。輪具所轉。故進上論。之佛及梵王名之。為梵。並開釋等。為梵。目如下。經說若有修行生天。梵家。此世等。是佛之。因故。了。經云。因世無量。得世世無。事。梵王。行世。開。初。釋。具。四。無。量。諸。佛。行。世。世。慈。乃。行。以。大。佛。禮。百。故。俱。舍。論。云。經。說。四。人。能。生。梵。天。一。為。供。養。如。來。故。禮。百。故。於。來。尊。家。云。為。供。養。四。方。僧。如。造。善。施。因。四。事。供。養。三。佛。事。已。能。和。四。於。有。情。善。事。等。其。梵。

松 本 司

業二不得販賣。生以為業。若自有。真。業。但。得。賣。其。屠。兒。二。不。得。販。賣。其。前。刀。以。為。業。三。不。得。沽。酒。為。業。若。自有。真。業。者。聽。四。不。得。販。賣。多。故。若。無。真。業。得。五。不。得。作。五。大。色。深。業。沙。等。外。國。諸。法。多。故。若。無。真。業。得。五。不。聽。者。是。法。相。也。經。目。善。男。子。今。當。持。此。法。已。下。第。三。正。明。法。滅。二。眾。之。中。羅。漢。水。持。法。之。首。此。法。被。用。救。證。法。滅。然。此。所。說。是。別。家。別。時。非。此。法。大。十。眾。無。佛。法。相。害。緣。起。廣。如。經。說。經。目。今。時。拘。尸。已。下。第。三。明。大。眾。開。法。後。同。聲。傳。歡。也。如。文。可。知。

海東傳教沙門 法賢 撰 抄勤

大般涅槃經疏卷第九

VI

大般涅槃經疏卷第十 經第十九至第二十一 唐大馬橋寺沙門 法賢 述  
經曰。今時。王舍。至。橫。加。進。此。品。大。文。第。三。邊。闍。垂。事。也。文中。有。三。一。闍。王。追。悔。二。六。臣。邪。論。三。有。婆。塞。在。初。相。文。有。四。一。惡。心。起。進。二。追。悔。生。屠。三。惡。心。起。故。四。自。覺。罪。因。此。大。初。也。遠。云。此。審。就。闍。王。雖。悔。進。罪。以。顯。善。德。故。生。行。也。今。詳。闍。王。起。進。之。迹。不。在。受。其。罪。家。故。未。由。神。教。前。事。雖。復。遍。體。生。屠。然。非。病。行。廣。如。經。說。今。詳。闍。王。行。進。事。故。其。悔。時。也。何以。得。知。無。量。善。經。已。說。闍。王。行。進。事。故。其。悔。時。也。惡。釋。云。惡。者。意。也。謂。性。惡。善。行。故。善。至。有。善。報。者。具。勤。三。業。也。其。心。悔。惡。唯。見。現。在。不。見。未。來。者。作。進。心。故。貪。現。在。位。不。見。未。來。受。善。報。也。此。以。惡。人。而。為。善。報。者。即。謂。違。等。同。善。報。及。也。今。詳。現。世。已。下。正。明。起。進。也。經。曰。因。苦。父。已。至。前。道。不。違。第一。追。悔。生。屠。也。因。苦。父。已。至。不。可。前。道。者。當。已。生。悔。發。起。身。屠。也。身。自。念。苦。父。已。下。

善。者。無。行。環。無。善。者。無。善。受。理。善。之。性。善。善。無。善。者。善。音。無。相。也。是。故。涅槃。名。為。大。無。相。也。以。是。義。故。名。大。涅槃。者。以。有。樂。義。故。名。大。涅槃。也。復。次。至。故。名。大。樂。者。明。凡。天。無。樂。佛。有。樂。也。復。次。至。名。大。涅槃。者。別。對。三。受。顯。涅槃。也。經。曰。二。者。大。教。靜。故。已。下。第。二。就。教。靜。顯。也。經。曰。三。者。一。切。知。故。已。下。第。三。就。一。切。知。顯。也。經。曰。四。者。身。不。壞。故。已。下。第。四。就。身。不。壞。顯。也。經。曰。善。男。子。世。間。名。字。至。故。得。名。為。大。般。涅槃。第三。釋。名。也。以。無。日。緣。離。名。相。故。是。常。義。也。迦。迦。迦。迦。為。聲。也。究。竟。緣。離。緣。離。也。四。因。五。因。是。離。聲。也。餘。文。可。釋。經。曰。以。純。淨。故。已。下。第。四。釋。淨。也。文中。有。四。一。新。二。十五。有。故。淨。三。清。淨。故。淨。三。身。清。淨。故。淨。四。心。清。淨。故。淨。如。文。可。釋。經。曰。善。男。子。已。下。結。第一。功。德。也。

大般涅槃經疏卷第十

海東傳教沙門 法賢 撰 抄勤

VII

海東傳教沙門 法賢 撰 抄勤  
善。男。子。五。百。外。來。諸。國。大。眾。三。千。奉。宣。摩。造。 將。住。那。有。堂。水。南。基。所。凡。書

順天松廣寺堂司母命



ぬけれども、義淨の譯場は亦た此の寺にもあつたのである。それは同じ宋高僧傳卷一の義淨の傳唐京兆大薦福寺義淨傳に詳かである。今ま其の文を節略して（經名等、當面の問題に關係のうすい文字が多くあつて煩はしいから）左に掲げる。

初與于闐三藏實又難陀讎華嚴經、久視西紀七〇〇之後、乃自專譯起、庚子歲即ち久至長安、陽より、

癸卯、長安三年、西紀七〇三於福先寺前東太原寺といへる寺にて、東都にあり及雍

京西明寺、譯金光明最勝王等經凡二十部、暨和帝中宗の誤神龍元年乙巳、西紀七〇五於東洛內道場、譯

孔雀王經、又於大福先寺、出勝光天子・香王・菩薩呪・一切莊嚴王經四部、帝深崇釋典、特抽睿

思、製大唐龍興三藏聖教序、又御洛陽西門、宣示群官新譯之經、二年、淨隨駕歸雍京、置讎經

院於大薦福寺居之、三年西紀七〇六詔入內、與同讎

經沙門、九旬坐夏、睿宗永隆元年庚戌、西紀七一〇景雲の誤、於大薦福寺出浴像功德經等二十部、景雲二

新たに發見せられた涅槃經の疏

年辛亥西紀七一〇、復於大薦福寺、譯稱讚如來功德神呪等經、自天后久視、迄睿宗景雲、都讎出五十六部二百三十卷、先天二年西紀七一三卒、

斯くの如く義淨が洛陽の福先寺と長安の西明寺とを譯場としてゐたのは、武后の長安三年から中宗の神龍元年にかけての三年間であつて、神龍二年以後の譯場は長安に於ける大薦福寺の讎經院であつたのである。従つて新發見の涅槃經の疏に「唐大薦福寺沙門法實述」とあるのは、福先・西明二寺に於いて義淨の譯場に預かつた實が、また大薦福寺に於いて其の事業に携はつたことを語るものである。而して此の北本涅槃經の疏十數卷は其の間にできたものに相違ない。たゞ實がいつまで大薦福寺の讎經院にゐて、何年に卒したか、之を徵すべき資料がないが、義淨は睿宗の景雲二年略ぼ讎經の業を終り、其の翌々年なる玄宗の先天二年には入寂したのであるから、實の涅槃經疏のできたのは、神龍二年以後先天

第一二卷 五一九



二年以前（西紀七〇六——七一一）と見ておきて大なる過はなからう。

法寶の撰述で、今日現に流布してゐるのは、我が藏經書院の續藏經の中に收めてある俱舍論疏三十卷と一乘佛性究竟論第三卷とがあるのみで、彼れの涅槃經疏については絶えて聞く所がない。然るにそれが偶然松廣寺に於いて發見せられたのである。又た

南本涅槃經の疏には、大般涅槃經疏玄義二卷（隋灌頂撰）及び大般涅槃經疏三十三卷（隋灌頂撰、唐湛然再治）があつて、俱に弘教書院の縮刷藏經調映六―七の中に入れてあるけれども、北本涅槃經の疏として

知られてゐるものはない。然るにたとひ零本であるとはいへ、明かに其の疏と認めらるゝものが發見せられたのである。余が前に日本・支那・朝鮮を通じて他に傳はつてをらぬ唯一無二のものといつたのは之を意味する。たゞ將來の發見は固より立言の限りでなす。

### 三 經疏の開板と義天

新出の涅槃經疏は、各卷の尾題の次に「海東傳教沙門義天校勘 壽昌五年己卯歲高麗國大典王寺奉宣雕造」といふ奥書を具へてゐる。此の奥書があるから本書は朝鮮の古板本として亦た頗る珍しい。

義天はいふまでもなく高麗文宗の第四子祐世僧統煦である（義天は字、諡號大覺國師）。其の事歴は金富弼撰五冠山靈通寺大覺國師碑、林存撰南崇山偃鳳寺大覺國師碑、高麗史卷九文宗諸子傳等に見えてゐる。文宗十九年（西紀一〇六五）十一歳で出家した彼れは、若年の時から古今に互つて三藏の疏鈔を蒐集するを己れの任とし、其の搜訪に力を盡した。父王の薨じた翌々年宣宗二年、西紀一〇八五即ち三十一歳の時、潜かに宋の商船に乗つて渡航し、五冠山靈通寺の碑に「始自密今之山東省諸城縣之地 至京、宋都汴京 以及吳越、往來凡十有四月、所至名山勝境、諸有聖迹、無不瞻禮、所遇

高僧五十餘人、亦皆咨問法要」と叙べてあるやうな巡禮行を遂げて歸國したが、これも、主要なる目的は古今の諸家の章疏の蒐集にあつたのであつて、其の將來した教乘については、自ら兄王宣宗に上つた「至本國境上乞罪表」に「今奉勅、賜聖考御容宗の文影並諸佛舍利五十五・知識像・花嚴大不思議論等諸宗教藏三千餘卷、於今月十二日離明州、十九日放洋、已到國境」といつてゐる。而して遂に二十年來苦心して蒐集した三藏の疏一千十部、四千七百四十餘卷の目錄三卷を編んで、新編諸宗教藏總錄と名づけ、次の自序を附して世に示した。

昔永平之後、葉書繼至、翻譯流通者、無代無之、爰及貞觀、經論大備、繇是西聖之教、霑然莫禦也、自聶道真道安、至于明佺宣律師、各著目錄、謂之晉錄・魏錄等、然於同本、異出舊日新名、多惑其文真偽相亂、或一經爲兩本、或支品爲別翻、四十餘家紛然久矣、開元中、始有大法師、

新たに發見せられた涅槃經の疏

厥号智昇、刊落訛謬、刪簡重複、總成一書、曰開元釋教錄、凡二十卷、最爲精要、議者以爲、經法之譜、无出昇之右矣、住持遺教、莫大焉、予嘗竊謂、經論雖備、而章疏或廢、則流行无由矣、輒效昇公護法之志、搜訪教迹以爲己任、孜孜不捨、僅二十載于茲矣、今以所得新舊撰撰諸宗義章、不敢私祕、叙而出之、後有所獲、亦欲隨而錄之、脫或將來編次函帙、與三藏正文、垂之无窮、則吾願畢矣、時後高麗十三葉、在宥之八年、歲次庚午、八月初八日、海東傳華嚴大教沙門義天叙、

高麗第十三代の主宣宗の即位の八年庚午は、所謂踰年稱元法を用ひた高麗史の紀年の第七年で、即ち義天の宋から歸國した後四年である。

さて義天は宋から還つて間もなく、宣宗の命によつて興王寺（國都開京の南にあつた文宗の願刹）の住持となつた。さうして彼れが此の寺に於いて教藏

を開板したことは、高麗史<sup>卷九</sup>の彼れの傳に「又於興王寺、奏置教藏都監、購書於遼・宋、多至四千卷、悉皆刊行」と見えてゐる。然かも是等の書がどうなつたか、今は全くわからぬが、其の片鱗ともいふべきものが、珍しくも我が南都佛教圖書館の藏本の中にある。去る大正四年十一月、京都の佛教各宗學校の聯合して主催した第一回大藏會の際の陳列目錄に

華嚴經隨疏演義鈔（版本）

東大寺圖書館藏

卷五、下奥云

大安十年甲戌歲高麗國大興王寺奉 宣雕造

卷二十、下奥云

(三)

壽昌二年丁丑歲高麗國大興王寺奉 宣雕造

とあるのがそれである。なほ大藏會の催のある數年前に此の古板本を世に紹介した妻木直良氏の文<sup>(3)</sup>の中には、第十八卷下の末尾の寫真が挿入してあつて、それには

大方廣佛花嚴經隨疏演義鈔卷第十八下

壽昌二年丙子歲高麗國大興王寺奉 宣雕造とある。遼の大安十年甲戌<sup>西紀一〇九四</sup>は高麗宣宗の十一年で、義天の教藏總錄を編した後四年、壽昌三年丁丑<sup>西紀一〇九七</sup>壽昌は遼史の壽隆に相當するのであるが、壽隆は壽昌の誤である。は肅宗の二年で、更に三年後である。而して此の隨疏演義鈔は義天の教藏總錄<sup>卷一</sup>の華嚴經の部に

隨疏演義鈔四十卷<sup>或開爲六十卷 和山寫本八十卷</sup>

澄觀述

と見えてゐるものである。又た妻木氏の他の文<sup>(3)</sup>に依ると 尾州眞福寺には

壽昌五年己卯歲高麗國大興王寺奉宣雕造、正二

位權中納言兼太宰帥藤原朝臣季仲、依仁和寺

禪定二品親王仰、遣使高麗國請來、即長治二年

乙酉<sup>西紀一一〇五</sup>壽昌五年を去る六年の後 五月仲旬、從太宰府差專

使奉請之、

弘安五年壬午九月六日於高野山金剛三昧院

金剛佛子性海書

弘安五年壬午十月廿一日於高野山金剛三昧院

金剛三昧院老比丘良俊記之

といふ識語ある邊の志福の釋摩訶衍論通玄鈔の古寫本を藏してゐるさうであるが、此の書も教藏總錄三卷の釋摩訶衍論の部に

通玄鈔四卷 志福述

と記してある。従つてかやうな奥書のある古版本乃至古寫本は、義天が彼れの終局の希望として、教藏總錄の序文に「脱或將來編次函帙、與三藏正文○草疏を含○草まない在來の藏經 垂之无窮、則吾願畢矣」と述べた所を、其の後、興王寺の教藏都監に於いて著々實現したことを證據だてる屈竟なる材料である。壽昌五年己卯西紀九九は高麗肅宗の四年で、教藏總錄の編成を去る九年の後である。

ところが松廣寺の涅槃經疏二卷が新たに小田氏によつて發見せられ、義天の努力の貴重なる形見が一つ増えた。之については、小田氏自ら「朝鮮古書の一瞥」の中に述べられた所に盡きてゐる。即ち、先づ

新たに發見せられた涅槃經の疏

前掲の華嚴經演義抄二冊○第五卷及び二十卷は義天の監督の下に刊行せられた四千餘卷の中であることは疑ない。ところが之が何時しか内地に傳はつて今日まで殘存し、以てこの有名なる事業の面影を止むるのみならず、「我國に存在せる刻書中、明かなる年代を記せる最古唯一の書」となつたのである。誠に珍中の珍と稱すべきである。といひ、次に、

然るに私は本年七月二日、公用を以て全羅南道順天郡双溪山松廣寺に出張した際、偶然にも右○東大寺圖書館所藏の華嚴經疏演義抄と同様の經本と思はるゝものを一冊發見した。即ち左の通である。

大般涅槃經疏 卷第九 一冊(木版本)

(奥書云)

海東傳教沙門 義天 校勘

壽昌五年己卯歲高麗國大興王寺奉 宣雕造

將仕郎司宰丞同正臣蔣 髦 書

華嚴經隨疏演義鈔の奥書には「海東傳教沙門義天校勘」の文字や筆者の名は見へぬようであるが、其の他の奥書は兩者誠によく一致して居る。私は右大般涅槃經疏の字體紙質並に奥書等からして、一見義天の歸國後に刊行したもの、一と鑑定したのであるが、前記華嚴經演義鈔の奥書と對比して、益自信を強くするのである。殊に「海東傳教沙門義天校勘」の文字が本書の奥書にあるのは、何より面白い。又雕造年代も壽昌五年であるから、前書卷二十下の壽昌二年に比して僅かに三年の差である。不幸にして私は未だ前書を實見しないが、何時か兩者を比較して本書の價值を定めたいと思つて居る。果して本書が前書と同様のものであるならば、義天の事業の片影がまた之によつて窺はれると思ふ。

と云つてをられる。

前記の妻木氏の文に挿入してある華嚴經隨疏演義鈔の寫真と新出の涅槃經疏とを比べて見ると、前者の各行二十字詰であるのに對して、後者は二十二字詰であり（行數は妻木氏の示された部分の寫真ではわからぬ）、前者には版下の書者の名を著していないやうであるが、後者には各卷の尾に「將仕郎司宰丞同正臣蔣髦書」とある。全體の體裁の上にかやうな相違はあるにしても、其の原板は、共に義天が教藏總錄を編した後九年以内に興王寺の教藏都監に於いて雕造せしめたものである。これには何の疑もない。而して東大寺圖書館所藏の華嚴經隨疏演義鈔及び松廣寺の涅槃經疏は、雕板當時の印本であらうと、余は思ふ（雙方の原本を實見して之を比較したわけではないが）。又た涅槃經疏と同じく壽昌五年己卯の歲に雕印せられた釋論通玄鈔が、僅かに五年の後我が國に將來せられたことは、上に引用した眞福寺本釋論通玄鈔の識語によつて明かであつて、これも非常

に面白い事實であるが、古版本として新出の涅槃經疏と兄弟の關係ある東大寺圖書館の華嚴經隨疏演義鈔も、或は同時の將來ではあるまいかと思はれる。——太宰帥藤原季仲をして佛書を高麗に求めしめたといふ仁和寺の門跡は、白河天皇第三の皇子覺行法親王である。而して釋論通玄鈔の將來せられた堀川天皇の長治二年乙酉は高麗肅宗の十年（義天示寂の後四年）に當る。しかし高麗史には此の交渉に關する記事がない。

さて義天自ら校勘して刊行した此の涅槃經疏も、澄觀の隨疏演義鈔や、志福の通玄鈔の如く、其の名が教藏總錄に掲げてあるであらうと思つて、同書<sup>一巻</sup>の涅槃經の部を檢べて見ると、三十部、百〇七卷の註釋書の列記してある中に

疏十八卷

灌頂述  
湛然再治

玄義二卷

灌頂述

とあるのは、今日まで傳はつてゐる南本涅槃經の疏

新たに發見せられた涅槃經の疏

であり（前に述べた如く）、而して

疏二卷<sup>或二卷</sup> 法寶述

は吾人の問題とする法寶其の人の疏ではあるが、しかも新出の疏二卷は、本來少なくとも十數卷で完結してゐたもの、一部分であるから、卷數の著しい相違が兩者の同一であることを否認する。教藏總錄所載のものは、必ず北本涅槃經の略疏か、若くは他の涅槃經の疏で、新出の疏に比して頗る簡略なものであつたのであらう。してみると、壽昌五年（肅宗四年）開板の法寶の涅槃經疏は、教藏總錄には擧つてをらぬわけで、それはやがて本目錄編成後に本書の採訪せられたことを暗示してゐるものであらう。義天は總錄の序に「後有所獲、亦欲隨而錄之」といつてゐるが、大覺國師文集<sup>卷一</sup>に收めてある「荅大宋元昭律師書」を見ると「承示及、慈愍三藏<sup>唐の僧慧日</sup>の淨土集一冊、并新刪定尼戒本等、已令印、經所重彫流布也、其淨土集、自來未行、而近有海客、將到禪宗解謗書

一卷、始知慧日有淨土集、方欲求本忽見流通、誠所謂法王大寶自然而至也、但恨纔獲半珠、未窺全寶耳、盛製大部律乘淨土文字、切望寄示爲幸」とあつて、宋から歸國した後も、漏れなく諸家の章疏を集めることに努力してゐた一斑がわかる。法寶の涅槃經疏も斯くの如くにして獲られたものではあるまいか。果してさうならば、小田氏の發見は亦た此の點に於いて頗る興味ある事實である。

最後に、かやうな珍本の發見せられた松廣寺について一言して置く。寺は順天郡松光面外松里にあつて、高麗時代からの古刹である。東國輿地勝覽卷四順天都護府佛宇の條に「松廣寺、一名大吉祥、在曹溪山、○李穡詩、巍々修禪社、遠在松廣山、額曰大吉祥」云々と記るしてある如く、松廣は高麗時代の山名であり、當時の寺名は吉祥であつた。修禪社といふのは、高麗の曹溪宗の開祖佛日普照國師知訥（毅宗十二年生、熙宗六年歿、西紀一一五八〇）の創めた結社の名、而して知訥が此の社を

設けてから、吉祥寺が海東の名刹となつたことは、知訥の入寂の數年前熙宗三年、金泰和七年、西紀二〇七熙宗の命によつて崔誥の撰んだ大乘禪宗曹溪山修禪社重創記①に「昇平郡管内富有縣曹溪山者故之松廣山也、修禪社者古之吉祥寺也、新羅時、有僧慧隣者、始創而居之、厥後星霜累換、風飄搖遷、棟朽椽崩、堂宇略盡、雖村夫野叟之居、不毅於此矣。仁廟朝、山僧釋照、將欲剏成大刹、鳩材集工、而不幸身沒、其所成立、更皆以爲墟、迫二十餘年、時曹溪名僧知訥、逃名投山、始入公山清凉峯、專修禪觀、從而學者成市、以其人衆而地狹、不可以居、乃使門弟守愚、遍歷江南、求結社安禪之地、愚師偶入此山、周覽形勢、有廢寺焉、僅一百間、居僧不指三四十、然是土也、境勝而地肥、泉甘而林茂、真可謂修心養性、集衆作福之所也、於是與道侶天真・廓照兩山人同心戮力、自丁巳年○明宗二十一年、西紀一一七經始、伐木輦土、經之營之、凡立屋八十餘間、佛宇・僧寮・齋堂・厨庫、無一不備、九載功畢、是大金

泰和五年、○熈宗元年、西紀一二〇五 以其年十月初一日、受朝旨、

約一百二十日、設慶讀法會、開堂設禪、點破大慧禪

師語錄、夜則安居靜慮、申華封之祝、以落成焉」と

見えてゐる。なほ此の事は知訥示寂の翌年金君綏の

撰んだ碑銘にも詳かである。而して普照以下の修禪

社主の碑銘を集めて其の法脈を示した李能和氏は、

此の寺について「朝鮮今稱三寶寺刹、一曰佛寶大本

山通度寺是也、以新羅時、慈藏律師、入唐得佛骨及

佛袈裟、還安于本寺故、二曰法寶大本山海印寺是也、

以高麗大藏經板本、藏于本寺故、三曰僧寶大本山松

廣寺是也、以高麗普照國師以後、眞覺・清眞・冲鏡・眞

明・晦堂・慈眞・慈靜・圓鑑・慈覺・湛堂・妙明慧鑑・妙嚴

慈圓・慧覺・覺儼・復菴・淨慧・弘眞・高峯和尚以上諸人、

法作十燈々相續、懶翁王師・幻菴國師・無學王師、亦住

本寺、故松廣、在我海東、實爲靈山道場、亦爲曹溪

寶林」といつてをられる。(註) 松廣寺は斯くの如き名刹

であるから、無二の珍本がこゝから見出だされたの

新たに發見せられた涅槃經の疏

は必ずしも偶然でないといへよう。しかし他にどんな遺物があるか、余は知らぬ。

大正十一年十一月十三日稿

余は今年の夏、義天の事歴を詳かに知らうとして、大覺國師文集及び同外集を閲讀する必要に迫られた。然かも内地に於ける本書の所藏者が極めて少なく、而していろいろの事情から、それを借覽することが頗る面倒に感ぜられた。因つて書面を以て朝鮮總督府中樞院書記官長小田幹治郎氏にはかつたところ、特別なる厚意を以て直ちに加佛山海印寺の刻板から新たに印出せしめた一本を寄せられたので、余は研究上多大の便宜と利益とを蒙つた。而して今ま此の文を草するに際しても、机邊に於いて之を利用することができた。特に茲に附記して氏に深謝する。

註

(一) 第一號——京城の府立圖書館開設に際して發刊せられた臨時號。

(二) 西晉白法祖譯、佛般泥洹經(二卷)、東晉法顯譯、大般涅槃經(三

卷)、失譯、般泥洹經(二卷)は、小乘部の涅槃經で、何れも同本の

異譯である。又た中阿含の中にも白法祖譯、大愛道般泥洹經(一

卷)、宋慧簡譯佛母般泥洹經がある(縮刷藏經、伏快)、大乘部の涅槃經を譯したものは、法顯の大般泥洹經(六卷)、方等般泥洹



經(二卷)等があるが(縮刷藏經、盈軌、みな完譯でない)。

(3) 縮刷藏經、盈軌、五一八。

(4) 大日本續藏經、第一輯、第八五套、一一五册。

(5) 同上、第一輯、第九五套、第四册。

(6) 大覺國師外集、卷十二。李能和氏著朝鮮佛教通史、下編、三〇五—三一四頁。——大覺國師外集には缺板があり、朝鮮金石總覽(上卷、九六號)に收めてあるものは泐字が非常に多い。通史所載のものが比較的良好である。

(7) 朝鮮金石總覽、卷上、第九九號。大覺國師外集、卷一三。朝鮮佛教通史、下編、二九九—三〇五頁。

(8) 大覺國師文集(卷一四)に收めてある「代世子集教藏發願疏」は、義天の十九歳の時の作で、中に「披桑木之區、素仰竺乾之化、雖經論而具矣、然疏鈔以闕如、欲以于古于今大遼・大宋凡有百家之科教、集爲一藏以流通」と叙べてある。又た同じ文集(卷一三)の「興內侍文冠書」には「予之爲人也、雖稟性至愚、早歲幸蒙先君(文宗)恩、度爲僧、賴以宿因、自十六七歲已來、從事于西方聖人之教、二十載于茲矣、然釋氏之教、流通中國者、百不一二矣、今所傳三藏正文僅六十千卷、其他古今賢哲注疏之家、一千年來无代无之、此又不能悉數也」と見える。

(9) 大覺國師文集、卷八。

(10) 此の書は朝鮮に於いては亡び、序文だけ大覺國師文集(卷一)の中に遺つてゐる。我が國には「安元二年丙申六月四日、以仁和

寺華嚴院法橋景雅御本書寫了 明空」といふ識語のある古寫本があつたが、轉寫によつて山城安樂壽院に傳はり、元祿六年に至つて開板せられた。安元二年(西紀一一七六)は平安朝の末造で、義天の本書を編した後八十六年に相當する。即ち本書は是れより以前に我が國に傳はつてゐたのである。しかし次に引用する所の序文は、元祿の刊本には魯魚の誤が多いから、大覺國師文集に據つた。

(11) 五冠山靈通寺大覺國師碑。朝鮮總督府博物館藏朴浩撰興王寺大覺國師墓誌(朝鮮金石總覽、卷上、九〇號)

(12) 考古學雜誌、第一卷、第八號(明治四十四年四月)「東大寺に於ける高麗古版經に就て」。

(13) 東洋學報、第二卷、第三號(大正元年九月)「契丹に於ける大藏

經彫造の事實を論ず」、三二八頁。

(14) 灌頂撰湛然再治の疏の現行本は三十三卷であるが、これはもと十八卷であつたのを開いたのであらう。

(15) 元昭は宋に於いて義天の謁した杭州靈芝寺の僧で、靈通寺の碑に所謂「所遇高僧五十餘人、亦皆咨問法要」の一人である。

(16) 李能和氏著朝鮮佛教通史、下編、三四六—三四九頁。

(17) 東文選、卷一七、曹溪山修禪社佛日誓願國師碑銘。

(18) 朝鮮佛教通史、下編、三七四—三七五頁。

## 補 説

### 東大寺の華嚴經隨疏演義鈔

本論の中に述べておいた如く、南都佛教圖書館所

藏の華嚴經隨疏演義鈔(四十卷)は、新出の松廣寺の  
涅槃經疏と兄弟の關係ある珍しい古版本であつて、

其の第十八卷下の末尾の部分を示した小さい寫眞  
は、考古學雜誌(第一卷第八號)所載の妻木直良氏の  
文の中に挿入せられてゐるが、これでは標本として  
も、少しく物足らぬ感があるから、余は本論を草す  
る前から、モリソン文庫主任文學士石田幹之助氏を  
煩はし、南都佛教圖書館に照會して撮影の手續を運  
んでゐた。ところが幸にも、本論を草し終つた後數  
日、たま／＼同氏が或る用務を帯びて奈良に出張す  
ることとなり、其の機會を利用して余の爲めに盡力  
せられたので、余は希望通りの寫眞を手に入れるこ  
とができた。こゝに挿入した寫眞版(圖版)は、それ

に多少の取捨を加へたものであつて、序文を含んだ  
第一卷上の首と、雕板年代の記るされてある各卷  
(第五卷下、第十八卷下、第二十卷下)の奥とを示  
したのである。

石田氏の調べによると、此の華嚴經隨疏演義鈔四  
十卷は全部卷子本であつて、卷の上と下とは各文字  
通りに一卷をなしてゐる。卷の初には藍色の縹紙を  
附し、其の表面の左端の上方に竪四寸四分、横一寸  
一分の題簽が貼つてある。印本を卷子に仕立てたも  
のであるから、一張毎に繼目があり、繼目は一の張  
の左端が次の張の右端の上に重なつてゐる。而して  
毎張の左端に細字を以て記してある經疏の略稱・卷  
數及び丁附は繼目の上に現はれてゐる(圖版第二)。一  
張の大きさは竪一尺〇四分(即ち卷子の縱幅)、横一  
尺八寸八分である。二十字詰の本文を挟んで上下に  
界線があり、其の間隔は七寸七分、隨つて天には幅  
一寸七分、地には幅一寸の空白がある。もつとも界

線には多少の歪があるから、是等の數字が各卷の何れの部分にも、正確に當てはまるといふわけではない。各卷の尾題の下には細字を以て總張數が示されてをり、それが更に奥書の次に重出してゐる場合もある(圖版第三)。

東大寺の華嚴經隨疏演義鈔の體裁に關して石田氏の示された所は大體斯くの如くである。そこでこれと松廣寺の涅槃經疏とを比べると、卷子本と方冊本との相違が先づ吾人の注意を惹く。しかし、これは同時代にできた古版本としての兩書を比較する上に於いて、ことさら重きをなす事實ではあるまい。涅槃經疏にしても、華嚴經隨疏演義鈔にしても、書名・卷數・丁數等を示した文字即ち所謂ハシラは、板面の中樞にないのであるから、其の印本に對しては、使用者の好む所に從つて、方冊・卷子・折本等任意の裝潢を施し得るわけである。而して石田氏の談によると、氏は演義鈔の各張の中樞を特に注意して視

たけれども、方冊本から卷子本に改裝せられたことを證據たつべき折目の形跡は全然なかつたといふ。だから涅槃經疏が方冊本であるのは、高麗でさう仕立てたのであり、演義鈔が卷子本であるのは、當初未裝のままに我が國に取寄せられたものが、こう仕立てられたのであらう、と思はれるのである。しかし、更に兩書を比較すると、天地の界線の間隔は、涅槃經疏の其れは七寸八分、演義鈔の其れは七寸七分で、大體同じであるが、字詰に於いては二十二字と二十字との相違がある。——行數は演義鈔の其れについて石田氏から報告を得なかつたから、茲に明言することはできない。——これは特に注意すべきであつて、即ち義天の畢生の事業として興王寺に於いて開板せられた四千餘卷の教藏が、悉く同一形式でなかつたことを推測せしむる料とならう。又た涅槃經疏の各卷の尾題の下の數字は、演義鈔の其等の如く、必ず各卷の總丁數を示したものでなければな

大方廣佛花嚴經隨疏演義鈔序

清涼山大花嚴寺沙門 盛觀 述

至聖垂誥鏡一心之玄極大士弘闡燭微言之幽致  
雖忘懷於謔旨之域而浩汗於文義之海蓋欲寄象  
繫之迹窮無盡之趣矣斯經文理不可得而稱也晉  
譯幽秘賢首頗得其門唐翻靈篇後哲未覩其奧不  
揆膚受輒闡玄微偶溢九州遐飛四海講者盈百咸  
叩余曰大教趣深疏文致遠親承旨訓曷歸近宗垂

範千古慮惑高悟希垂再剖得觀光輝順斯雅懷再  
此條理名為隨疏演義昔人云人在則易人亡則難  
今為此釋異選方終古皆若何會然繁則倦於章句  
簡則昧其源流願此才難有懸折中意夫後學其辭  
不枝矣

大方廣佛花嚴經隨疏演義鈔卷第一上 宣疏序

將釋此疏大分為四一摠序名意二歸敬請加三開  
章釋文四謙請迴向為順經文有四分故若順序正  
流通則合前二為序分開章為正宗謙請為流通為  
疏三分今初摠序名意即是疏序亦云教迹應分有

十三成尸毗大行即方便報恩經破盧至巨慳即是  
盧至長者經談般若等者大品廣說揚大教等者淨  
名大品等其類非一恐繁不能具出

大方廣佛花嚴經隨疏演義鈔卷第五下

大安十年甲戌歲高麗國大興王寺奉

宣雕造 奉寄進普門院常住

施主大法師正等

- I 卷第一上首 其一
- II 同上 其二
- III 卷第五下末尾
- IV 卷第十八下末尾
- V 卷第二十下末尾

無常即顯無性等言則觸類成教者證顯理義如前  
教體中明

大方廣佛花嚴經隨疏演義鈔卷第十八下

壽昌三年丙子歲高麗國大興王寺奉  
宣雕造

奉寄進

東大寺普門院常住也

施主大法師正等

發心不期自為即以向他為自益耳故今合誠同

大方廣佛花嚴經隨疏演義鈔卷第二十下

壽昌二年丁丑歲高麗國大興王寺奉

宣雕造





らぬ。本論の中には臆説として述べておいたけれども、演義鈔から確かな例證を得たから、斯く斷言する。随つて涅槃經疏の第十卷が四十七紙を數へるとすれば、其れは尾題の下の數字に對して二枚の缺丁を意味する。又た本論の中に述べた如く、第一回大藏會陳列目錄に、演義鈔第二十卷下の奥には「壽昌二年丁丑歲」云々とある、と見えてゐる。しかし、丁丑は壽昌三年に當るから、目錄の二年は三年の誤植であらうと思つたのであるが、此の部分の寫眞を得て、原本其のものに誤のあることが判つた(圖版、參照)。

演義鈔には書者の名を記るしてないけれども、それが涅槃經疏を書いた蔣髦でないことだけは、雙方の筆法の相違によつて明かである。藏教書院の續藏經を検すると、演義鈔や涅槃經疏と同じやうな雕造年代の奥書のある經疏が四五部收録せられてゐる即ち

華嚴經行願品疏(内題、貞元新譯華嚴經疏十卷)

新たに發見せられた涅槃經の疏

唐澄 觀述(第一輯、第七套、第三、四册)  
 華嚴經談玄決擇 六卷 遼 鮮 演述(第一輯、第一、二、三、四、五册)  
 法藏和尚傳 一卷 新羅 崔致遠結(第二輯、第三編乙、第七套、第三册)  
 金剛般若經略疏 二卷 唐 智 儼述(第一輯、第三、四、五册)  
 地持論義記 十卷(卷三下、四上、五下のみ現存) 隋 慧 遠述(第一輯、第六、七、八、九、十册)

等であるが、中に就き、金剛般若經略疏及び地持論義記の奥書には書者及び校勘者の名が著してあるから、左にそれを掲げよう。

〔金剛般若經略疏卷下奥〕

壽昌元年甲戌歲高麗國大興王寺奉 宣雕造

祕書省楷書臣魯榮書

講華嚴經興王寺大師賜紫臣則瑜寺校勘

〔地持論義記卷第五下奥〕

壽昌三年丁丑歲高麗國大興王寺奉 宣雕造

將仕郎尚舍直良國正臣 蔣髦 書

講瑜伽論崇教寺大師 賜紫沙門臣 玄湛校勘

第一二卷 五三一

講瑜伽論玄化寺大師 賜紫沙門臣 會凡校勘  
講瑜伽論玄化寺大師 賜紫沙門臣 覺樞校勘

興王寺に於いて開板せられた諸宗の教乘は四千餘

卷に上つたのであるから、書者が一人や二人でなか

つたのは當然である。それにしても涅槃經疏の書者

たる蔣髦の名が、また地持論義記の書者として、た

まゞ其の奥書の中に見えてゐるのは面白い。のみ

ならず、地持論義記其のものについていへば、上に

列記した本書以外の諸章疏には、支那や我が國で覆

刻或は筆寫したといふ識語が附いてゐるのに、これ

にはさやうなものがない所から察すると、續藏經の

編者の採訪した本書の原本は、興王寺で開板した當

時の古版本ではあるまいかと思はれる。惜しいこと

に、續藏經には所收の佛典の出所や所藏者の名が一

切掲げてないから、どこから獲られたものであるか、

吾々門外漢には判らぬが、若し余の想像通りであつ

たならば、今日現存してゐるのは十卷中の一部であ

るとはいへ、松廣寺の涅槃經疏、東大寺の演義鈔と  
相並んで三幅對の珍しい古板經となるべきものであ  
らう。

(大正十一年十二月一日稿)